

第18回金融教育に関する実践報告コンクール

優秀賞

生活科を中心とした小学1年生から はじめる金融教育の提案

－離島・へき地地域のコミュニティ経済を活かして－

沖縄県・竹富町立波照間小中学校 教諭 山本 銀兵

知るぽると

www.shiruporuto.jp

© 金融広報中央委員会 2021

1. はじめに－先行研究及び実践の検討と本実践の位置づけ－

高度に複雑化した昨今の経済社会において、金融リテラシー¹⁾の必要性が叫ばれて久しい。金融広報中央委員会が2019年に行った金融リテラシー調査では、金融リテラシーに関する問題の正答率や望ましい金融行動、考え方の項目で日本の金融リテラシーの現状は芳しくない²⁾。海外には幼児教育から系統的な金融教育を行っている地域もある³⁾ということも踏まえれば、我が国も金融教育のますますの充実が求められる。こうした関心に基づき、先行研究に目を向けてみると、神山久美の消費者教育に関する一連の研究が注目に値する。消費者教育は金融教育と関係が深い領域である⁴⁾ことから、金融教育に関する先行研究として検討する必要があるだろう。神山(2012)は家庭科教育の視座から消費者教育の理論的検討や実証的研究の推進、蓄積を念頭にその指導法の改善について論究している。アクション・リサーチの手法によって得られたデータに基づいて生徒の意識の変容を分析しているが、注目すべきは「消費者市民としての意識を形成させることは不十分であった」⁵⁾とするところである。神山(2012)はこれについて、「市民として役割・責任が問われるような経験がほとんどないためではないか」⁶⁾と考察しているが、これは金融経済についての諸知識の獲得や模擬的体験によって、現実社会の経済社会に適応させようとする金融教育、消費者教育に概ね共通する課題であると考えられる。即ち、当事者意識が金融教育、消費者教育の充実に大きく作用するというのであれば、子どもたちが自らを経済システムの一員としてより意識できるような指導過程が必要となるだろう。神山(2012)の研究は中学生を対象としているが、その他にも小学生を対象とした教材開発⁷⁾や消費者教育推進のための組織体制の研究など⁸⁾を行っている。このようにしてみると、一部地域の先進的な取り組みとはいえ、消費者教育の組織的且つ体系的な体制が整ってきているように見受けられる。

一方で、教科論の立場からは小学校低学年における消費者教育の充実を求める声が上がっている。松葉口玲子(2017)はこれまで消費者教育が語られる際、生活科の内容構成の中に「消費」が位置付いているという点がほとんど看過されてきたことを指摘する⁹⁾。また、石川智子ら(2020)は、エシカルコンシューマー育成の観点から生活科に注目し、低学年からの系統的な指導について検討している¹⁰⁾。小学校低学年特有の教科である生活科が注目されているのである。松葉口は、「生活科の実践事例として消費者教育が行われるケースはほとんど見られない」とし、「日本の子どもたちは、生産者としてよりも消費者としての存在の方が大きいのは厳然たる事実である」という¹¹⁾。生産と消費は経済活動の両輪であることを踏まえたとき、消費者教育を充実させるには「生産」の視点を今一度重視する必要があるだろう。特に生活科の内容には「動植物の飼育栽培」が位置付けられており、指導展開の工夫によっては生産活動を充実させることができる。では、先行研究を見渡したとき、金融消費者教育の領域ではどれほどの低学年実践が蓄積されているだろうか。たしかに、金融消費者教育というトピックで検索をすれば、中等教育や高等教育で取り組まれている実践が圧倒的に多いことがすぐにわかる。しかし、低学年実践に関する情報が皆無かといえそうではない。野村宏行(2017)が小学校低学年で「金融教育プログラム」を活用した学習を紹介している¹²⁾ように、ウェブサイト「知るぼと」には「金融教育プログラム」として実践事例が掲載されており、低学年実践の事例もある¹³⁾。しかし、これらの低学年実践事例も中学年以上の取り組みの充実と比すれば、十分であるとはいえない。

以上の先行研究及び実践の検討を踏まえ、本論では次のように視点を設定して金融教育実践に取り組み、その経過及び今後の見通しを報告する。①小学校低学年生活科を中心として「生産と消費」という経済活動の一連の流れを指導過程に仕組むこと。②子どもたちに当事者意識をもたせる指導過程を仕組むこと。①については指導計画に具体化しているので参照頂きたい。②については若干の補足を加える。即ち、「自分たちがつくったもので資金を得て、自分たちに必要なものを購入する」という意識の流れに導くように学習を進めると同時に、各授業場面では、例えば値段の決定やバラ売り・まとめ売りの決定など、様々な場面で子どもたちの意思決定を尊重するようにした。そうすることで自分事として意欲を高く保ちながら活動し、当事者意識をもって金融の学習に取り組めるものとする。

2. 地域経済と本学級の実態

本校は、日本最南端の有人島・波照間島に位置する全児童・生徒数44名の小中併置校である。交通、通信条件は非常に悪く、へき地教育に係る様々な課題を抱えている。経済活動の制限も大きく、島には商業施設はないので独自のコミュニティ経済が機能することで島民の生活を支えている。島に5つある共同売店¹⁴⁾は島のコミュニティ経済の中心地であり、そこでは都市部から共同購入した商品や島民のとった農作物、海産物等が並んでいる。島民の生活を支える共同売店は波照間島の経済システムを学ぶ上で有効な題材の1つであると考えられる。また、波照間島には子どもを「ウタマ」と呼び大切に育てる風土がある。本学級の子どもたち(第1学年全児童数4名)も地域の人々から大変可愛がられているた

め、人見知りをしない子どもたちに育てている。子どもを非常に大切にしている地域と本学級の子どもの実態を踏まえ、地域社会との関わりの中で金融経済の基礎について学ばせたいと考えた。

3. 授業の実際

・〈なかよく あそぼう〉特別活動

本時は金融教育の出発点として、お金の必要性を感じさせる場面である。子どもたちは学級の友だちと仲良くなるためにやってみよう企画を話し合った。一番やりたいものは何かと教師が問うと、パーティーや海釣りなど道具や準備にそれなりの費用がかかる企画を挙げた。教師が「お金がかかりそうだけれど大丈夫かな」と切り返すと、小さい声で「お母さんにもらおう」という子どももいれば、「無理かな」と半ば諦めモードの子どももいた。予定通り、子どもたちの意識の中に、何か楽しい企画を行おうとすれば、それなりの費用が発生するという認識をさせることができた。

・〈やさいを そだてよう〉生活

学級会と並行して、生活科では栽培活動を進めていた。幼稚園での栽培活動の経験を思い出させることなどを通して、育てた経験のない野菜の栽培に意欲をもたせた。子どもたちは教師が用意したいくつかの中から、きゅうりを選択した。写真1～5の通り、1人1つのプランターを用意し「自分のきゅうり」という特別感をもたせた。今後の活動が自分事となっていきかけとなることを期待した。

・〈はてるま たんけんたい〉生活

・〈どうぞ よろしく〉国語

本時までにも数回、町探検を経験している子どもたちは学校から出て島を探検することが大好きである。国語のひらがなの学習でつくった名刺を地域の人に渡し、自己紹介をすることも楽しみにしている。本時の町探検では、共同売店へ行くことになっていた。保護者からお菓子やアイスを買ってもらった経験があることや、友達の母親が運営に関わっていたりすることから、共同売店は子どもたちにとって魅力ある場所であった。教師が何か買ったことがあるのかと問うと、口々に様々な商品の名を発していた。子どもたちの目がお菓子やアイスなどに向いていたため、教師は「野菜が売っているね。誰が売っているのかな」と声かけを行い、店員さんに聞くことを促すと、やっと島民が出品している野菜や加工品があることに気が付いた。さらに、店員さんから「これは〇〇のおじいさんが釣ったカツオのなまり節だよ」といった説明をいくつかしてもらい子どもたちは、共同売店には地域の人が出品している商品があることを理解した様子だった。

・〈パーティーを しよう〉特別活動

・〈やさいを じょうずにそだてよう〉生活

本時ではもう一度、学級のみんなと仲良くなるためにやってみようことについて話し合った。教師が「お金がかかるということで困っていたんだね」と切り出し、話し合いは再開された。ここまでの生活科の栽培活動と町探検での学習を踏まえて、子どもたちの中から「自分たちでお金をかせぐことはできないか」という意見が出ることを期待したが、話し合いはしばらく膠着状態が続いた。そこで、教師は子どもたちの視線を変えるため話題を変えてみた。「みんなが大事に育てているきゅうり、おいしく育つかな?」。子どもたちは「毎日水をあげているから、おいしくなる。」と自信満々。さらに、「おいしいきゅうりなら、みんな欲しがるね。島みんなも欲しがるね。きっと。」と振ると、「おかあさんが欲しいって言ってたよ。」「先生にもあげるね。」と答える中、1人の子どもが「たくさんできたらおもうけ!」と戯けてみせた。そこで、すかさず「もうかるんだね!どこかで売って?」と問いかけると、その子どもは「売店で売ればいい」と答えた。他の子どもたちもそれを聞くと、「面白そう」と賛同した。「じゃあ島の人にも買ってもらえるおいしくて安全なきゅうりを育てないといけないね。お世話は水やりだけでいいのかな?」。次時の生活科で子どもたちは図書館できゅうりの栽培方法を調べて追肥や摘心の必要性を学んだのち、「おいしいきゅうりをつかって売って、パーティーのお金を稼ごう!」ときゅうり栽培の目的を共有した。本時によって栽培活動に対する子どもたちの目的意識の明確化と意欲付けを図ることができた。以後、きゅうりの世話をより熱心に行う子どもたちの姿が見られた(写真6～8・資料1)。

・〈いくらでうっているかな しらべにいこう〉生活

・〈おおきいかずを かぞえよう〉算数

きゅうりが大きくなってくると、商品としていくらかで販売するのが話題にあがる。これを機会とみて教師は「いくらかで売りたい?」と授業で取り上げた。子どもたちからは1本200円とする案が出るなど、商品の適切な値段を判断することは難しい実態があった。そこでもう一度町探検を行い、共同売店の様々な商品の値段を調べることになった(写真9、10・資料2)。これに並行してすすめた算数の学習では、大きな数の計算問題にいつも以上に熱が入った。1年生には

難易度が高い計算を子どもたちが自ら設定して取り組む姿があり、各教科学習が有機的に関連すると同時に、自分事となっている様子が見えられた。資料3のように、子どもたちのきゅうりの販売価格も許容範囲に収まった。

- ・〈やさいを うりにいこう〉生活
- ・〈ぶんをつくろう〉国語
- ・〈かんばんをつくろう〉図工

野菜を収穫する度に生産者シールをつくって貼り、共同売店へ出荷しに行った(写真11、12)。共同売店のご厚意で人目につく場所に陳列棚を用意して頂き、図工で子どもたちが作成した看板の効果もあってか、きゅうりはすぐに売れていく(写真13・資料4)。子どもたちは出荷した翌日には売り上げを受け取りに行くが、そこで共同売店の運営の仕組みを知ることになった。共同売店では売り上げの1割を運営費に充てるため、子どもたちは自分がつけた値段より少ない金額を受け取ることになる。はじめは意味を理解していないようであったが、教師が「アイスを冷やしたりする電気代とかに使われるんだよ。売れたお金からみんなが少しずつ出し合うんだよ」と説明することで納得したようだった。売り上げを受け取る度に算数の学習で売り上げ、自分のお財布の中身を計算させた。自分自身で稼いだ売り上げは、財布に入れて大事に保管する様子が見られた。

4. おわりにー今後の展開と副次的な効果ー

(1) 今後の展開

今後は指導計画にある通り、必要なものを購入してパーティーを準備・実践し、「自分たちがつくったもので資金を得て、自分たちに必要なものを購入する」という一連の経済活動のふりかえりを行う。ここまでの学習で成果を述べるとすれば、子どもたちの生産、勤労の喜びを感じる姿、きゅうりの栽培という生産活動に対して粘り強く取り組む姿を見ることができたことである(資料5～7)。こうした経験の積み重ねによって、望ましい金融リテラシーが育まれていくと信じ、今後も充実した金融教育実践に取り組んでいきたい。

(2) 副次的な効果

実践半ばであるが現時点で筆者が感じた金融教育の良さについて、付け加えておきたい。それは授業を行う教師自身の金融リテラシーの成長である。筆者は本校に赴任して今年で2年目であるが、今年度金融教育実践を行ってからはじめて知ることになったコミュニティ経済の仕組みが多くあったのである。その最たる例が、本実践で子どもたちと一緒に学んだ「共同売店における売り上げの一部を運営費に充てる仕組み」である。金融リテラシーを育む必要性があるのは、子どもだけではない。金融教育は子どもたちと一緒に教師も成長することができる魅力ある学習であると同時に、深遠な教育領域だとも感じた。金融教育に限らず、今後も子どもたちと一緒に成長していける教師でありたいと考える良いきっかけとなった。

注1) 政府広報オンライン「暮らしに役立つ情報」 知らないと損をする？ 最低限身に付けておきたい「金融リテラシー(知識・判断力)」

URL <https://www.gov-online.go.jp/useful/article/201404/1.html>

閲覧日2021年8月16日

注2) 金融広報中央委員会「金融リテラシー調査2019年」の結果

URL https://www.shiruporuto.jp/public/document/container/literacy_chosa/2019/

閲覧日2021年8月16日

注3) 小山内幸治・北野友士・西尾圭一郎・氏兼惟和「幼児教育におけるデジタル紙芝居を用いた金融教育の実践」 滋賀短期大学研究紀要 第46号、p.183-184 滋賀短期大学 2021年

注4) 金融広報中央委員会「1.金融教育のねらいと基本的性格 (5) 金融教育と関連する教育領域〈金融教育と消費者教育〉」

URL <https://www.shiruporuto.jp/education/about/container/program/program01/program105.html>

閲覧日2021年8月17日

注5) 神山久美「アクション・リサーチによる消費者教育の指導法の改善」 名古屋女子大学紀要 第58号、p.302 名古屋女子大学 2012年

注6) 前掲5) p.301

注7) 神山久美「山梨県における小学校教員向け消費者教育の教材開発」 山梨大学教育学部紀要 第25号、p.127-132 山梨大学教育学部 2016年

注8) 神山久美「地域連携による消費者教育の教材開発ー文部科学省『平成30年度「連携・協働による消費者教育推進事業」における消費者教育推進のための実証的共同研究』ー」 教育実践学研究 第25号、p.141-151 2020年 ※山梨大学教育学部附属教育実践総合センター、その他、消費者教育に携わる教員養成や人材育成に関する研究など多数あるが本稿においては割愛する。

- 注9) 松葉口玲子「生活科・総合的な学習の時間への着目の意義—環境教育/ESDの制度化をめぐる議論を射程に入れて—」 消費者教育 第37巻、p.11-20 日本消費者教育学会 2017年
- 注10) 石川智子・大本久美子・荒木真歩「エシカルコンシューマーの育成—小学校低学年の生活科・道徳に焦点を当てて—」 生活文化研究 Vol.57、p.37-45 大阪教育大学家政学研究会 2020年
- 注11) 前掲9) p.16
- 注12) 野村宏行「小学校低学年における『金融教育プログラム』を活用する学習」 児童心理 6月号、p.86-90 金子書房 2017年
- 注13) 金融広報中央委員会「金融教育ガイドブック—学校における実践事例集」
URL <https://www.shiruporuto.jp/education/howto/container/guide/>
閲覧日2021年8月17日
同「授業の進め方・実践事例」
URL <https://www.shiruporuto.jp/education/howto/>
閲覧日2021年8月17日
- 注14) 厳密には、波照間島にある5つの売店のうち1つは運営形態として「共同売店」の形をとっていないが、元々は共同売店であったということに加え島民が経営していることから共同売店の理念は息づくものとして、島民は理解している。

指導計画書

金融教育の指導計画		
金融教育としての主要な学習	関連させる学習、並行して行う学習	
<p>〈学習活動名〉 教科</p> <p>○学習目標</p> <p>☆金融教育としての観点 (学校における金融教育の年齢層別目標)</p>	<p>〈学習活動名〉 教科</p> <p>○学習目標</p> <p>☆金融教育実践への関与点</p>	<p>◎子どもの個別的な意識の流れ</p> <p>□学級全体で意識化させたい思考</p>
<p>〈なかよく あそぼう〉 特別活動</p> <p>○1年間を一緒に過ごす仲間たちと楽しく過ごすために、やってみたいことをたくさん考え、計画し、1年間の学校生活に意欲と期待をもたせる。</p> <p>☆出てきた意見を、費用がかかるものとかからないもので分けることで、子どもたちに楽しい企画を実行するためには、お金が必要なものがあることに気付かせる。(Aア、Bア)</p>	<p>〈やさいを そだてよう〉 生活</p> <p>○継続して植物を栽培し、植物の生長に伴う様々な変化を楽しみながら関わり、「自分が育てた」という自信と愛着をもたせる。</p> <p>☆今後の展開として企図している野菜の販売に向けて、比較的栽培が容易であること、収穫量が多いことなどを目安に、1人1つのプランターで栽培活動を行っていく。</p>	<p>◎おにごっこをしたいな。</p> <p>◎おまつりがしたいな。</p> <p>◎パーティーがしたいな。</p> <p>□おかねがかかるあそびはできるかな。</p> <p>□なかなかきまらないな。こまったな。</p> <hr/> <p>◎きゅうりをそだてたいな。</p> <p>◎おくらにするよ。</p> <p>◎とまともいいな。</p> <p>□ひとりひとつのプランターでがんばってそだてるぞ。</p>
<p>〈はてるま たんけんたい〉 生活</p> <p>○地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所に関心をもち、それらに適切に関わったり、色々な意見をしたりすることで、自分の住む波照間島に親しみや愛着をもたせる。</p> <p>☆町探検をする中で、島の経済活動の拠点となっている各集落の共同売店の見学を仕組む。ここで子どもたちに、自分たちが栽培している野菜と同じものが商品として販売されていることを気付かせる。さらに、共同売店では島の人々が自分で栽培したり、つくったりした商品が販売されていることについて気付かせる。(Bイ、Dア、Dイ)</p>	<p>〈どうぞ よろしく〉 国語</p> <p>○名刺をつくり、ひらがなの練習をするとともに、町探検で出会った人々に丁寧な言葉で自己紹介をすることができるようにする。</p> <p>☆各集落の共同売店の店員さんとの交流を通して、子どもたちと島の経済活動の拠点である共同売店との関わりを深める。</p>	<p>◎このばいてんには、いったことあるよ。</p> <p>◎いろいろなものがうっているね。</p> <p>◎めいしをわたして、じこしょうかいできたよ。</p> <p>◎きれいなじでかいてあることをほめられたよ。</p> <p>□ばいてんのひとはやさしいひとだったね。またいきたいね。</p> <p>□きゅうりがうられているね。ぼくたちのそだてているやさいとおなじだね。</p> <p>□ばいてんにはしまのひとたちがそだてたやさいもうられているんだね。</p>

<p>〈パーティーを しよう!〉 特別活動</p> <p>○友達と楽しく過ごすためにやってみたいことの見解について、改めて考えることを通して、自分の意見を発表したり、他者の意見をよく聞いたりして合意形成を目指す。</p> <p>☆本時では、子どもの自分たちでも野菜を一生懸命育てて共同売店で売れば、パーティーをするためのお金を稼ぐことができるのではないかと、この考え方を吟味させる。そのことにより、前時で出てきた費用がかかる企画についての意見も実践の余地があるという点に気付かせ、意欲付けをする。(Dウ)</p>	<p>〈やさいを じょうずにそだてよう〉 生活</p> <p>○地域の人に買ってもらえる、おいしく、安全な野菜を育てるためにはどうすれば良いかを調べて、みんなで話し合い、愛情をもって毎日世話をする意欲をもたせる。</p> <p>☆本時までの過程で、子どもたちの植物の栽培活動の目標を明確にしていく。単に野菜を育てるということではなく、パーティーの費用を捻出するための目的的行動へと変容させることで、経済活動の一步を踏み出すことを企図している。</p>	<p>□わたしたちもばいてんでやさいをうっておかねをかせぐことができるかな。</p> <p>◎だいにそだてたらうれるとおもうよ。</p> <p>◎たくさんそだてられるかな。</p> <p>□ちいきのひとにかつてもらえるおいしいやさいをつくるにはどうすればよいかな。</p> <p>◎まいにちおせわをするよ。</p> <p>◎せんせいといっしょにやればいいよ。</p> <p>◎としょかんにあるほんでしらべるよ。</p> <p>□みんなでパーティーをするために、おいしいやさいをがんばってそだてて、ばいてんでうってみよう。</p>
<p>〈いくらで うっているかなしらべに いこう〉 生活</p> <p>○前時の町探検での発見を共有する中で、新たに湧いた疑問点や確認したいことを視点として、もう一度町探検をする。それら一つずつ確認することでそれぞれの発見について、気付きの質を高めていくようにする。</p> <p>☆栽培している野菜が生長するにつれて、商品としていくらで出荷しようかという話が展開される。小学1年生の児童にとっては経験も知識も足りない難しい問題であるが、共同売店で売っていた同一商品の値段がヒントとなることに注目させる。共同売店で売っている様々な商品の値段を調べて、商品の相対的な価値について感覚的に理解することを通して、適正価格で野菜を出荷できるようにする。(Aア、Bア、Bイ)</p>	<p>〈おおきいかずを かぞえよう〉 算数</p> <p>○10を単位として数を捉えることで、2位数の考え方、構成を理解し、簡単な3位数までの個数を讀んだり書いたりすることができる。</p> <p>☆本時と並行して行われている町探検で、子どもたちは共同売店で売られている商品の価格を調べている。既習である20までの数では対応できない商品の価格に出会うことにより、20より大きい数の学習に意欲をもたせる。様々な商品の値段を正しく讀んだり、その大きさについて比べたりする活動は算数的活動として価値あるものであると共に、自立した消費者としての初歩でもあると考えられる。</p>	<p>◎やさいがおおきくなってきたね。</p> <p>◎もうすぐうりにいけるかな。</p> <p>◎200 えんくらいでうるよ。</p> <p>◎たかすぎないかな。</p> <p>□いくらでうればいいかわからないよ。もういちどばいてんにしらべにいこう。</p> <p>◎ばいてんではおなじやさいがひとつで90 えんだったよ。</p> <p>◎20 よりおおきいかずでもかんたんによめるようになったよ。</p> <p>◎わたしは50 えんにするよ。</p> <p>◎ぼくはあいが80 えんだから、80 えんにするよ。</p> <p>□いろいろなねだんのものがあったね。おおきいかずのおべんきょうをもっとしたいね。</p>

<p>〈やさいを うりにいこう〉生活</p> <p>〈うりあげを もらいにいこう〉生活</p> <p>○収穫した野菜を出荷したり、売り上げをもらったりする活動を通して、小さな生産者として島の経済活動に参画している実感を味わわせるとともに、地域の人々との関わりを深めることで地域への愛着を深める。</p> <p>☆野菜が収穫できるたびに、自分で生産者シールをつくり、値札を貼って共同売店に出荷する。定期的に共同売店に顔を出すことで島の経済システムへの帰属意識を育むと同時に、島のコミュニティ経済（共同売店を媒体にしてものとお金の交換が行われている）（売り上げの1割を共同売店運営費に充てる）についての理解を図る。自分の手で初めてお金を稼いだことに対する喜びを感じさせると共に、働くことの素晴らしさに気付かせる。また、目的に応じて、稼いだお金を貯蓄しておくことの必要性について考え、適切に保管できるようにする。(Aア、Aイ、Bイ、Dア)</p>	<p>〈ぶんをつくろう〉国語</p> <p>○句点の打ち方や語と語の続き方に注意して簡単な文を書くことができる。</p> <p>☆お客さんに安心して買ってもらえるように、「誰がつくった、なにが、いくらなのか」がわかるような生産者シールをつくることを目標として文づくりに取り組む。</p> <p>〈かんばんをつくろう〉図工</p> <p>○かたちやいろ、描き方を工夫して、知らせたいことを絵で表現する。</p> <p>☆共同売店の店員さんに聞いた、よく売れるためのコツ（目立つ看板）を参考にして、自分たちのつくった野菜のおいしさを表現する看板をつくる。</p> <p>〈うりあげを かぞえよう〉算数</p> <p>○2位数の数の構成を基にした何十何十の計算の習熟を図る。</p> <p>☆売り上げをもらうたびに、自分たちが今いくらのお金を持っているかを確認する。</p> <p>〈てがみで しらせよう〉国語</p> <p>○語と語や文と文との続き方に注意しながら、思ったことや、伝えたいことを書けるようにする。</p> <p>☆自分たちの野菜がおいしかったかどうかなどの感想を聞くために、商品と一緒に封入する手紙を書く。自分たちの商品の価値を買い手からの声によって実感し、働くことの価値に気付くと共に役に立つ喜びを知る。</p>	<p>◎ぼくのやさいがうれるといいな。</p> <p>◎おいしいやさいですというぶんをかくといいとおもうよ。</p> <p>□おきゃくさんがあんしんしてかってくれるように、シールにじょうずにぶんをかこう。</p> <p>◎よくうれるためにもっといいほうほうはあるかな。</p> <p>◎ばいてんのおねえさんがめだつようにすればいいといていたよ。</p> <p>□いちねんせいがつくったやさいをあびるするかんばんをつくりたいな。</p> <p>◎ぼくのやさいはすぐうれたよ。</p> <p>□うったねだんとももらったおかねのねだんがちがうよ。へんだな。</p> <p>□うったねだんから、すこしだけおみせにおかねをあげるきまりなんだね。ばいてんのおてつだいさんのおきゅうりょうやでんきだいかでつかわれるんだね。</p> <p>□ぼくのやさいがほんとうにおかねとこうかんされたよびっくりしたな。うれしいよ。</p> <p>◎うりあげをけいさんしてみたいな。</p> <p>□おおきいかずのけいさんもできるようになってきたね。</p> <p>□たくさんのおかねがあるけどたいせつになくさないようにしようね。</p> <p>◎わたしたちのやさいをかったおきゃくさんはよろこんでくれたかな。</p> <p>◎わたしたちのやさいはおいしかったかな。</p> <p>□おてがみをかいて、おいしかったかきいてみたいね。おへんじがくるといいね。</p> <p>◎やさいをかってくれたひとがよろこんでくれてうれしいな。</p>
--	---	---

<p>〈なにが ひつようかな〉 特別活動 ○学級がもっと仲良くなるためのパーティーを実行するのに必要なものについて考えることを通して、自分の意見を発表したり、他者の意見をよく聞いたりして合意形成を目指す。 ☆合意形成を図る上では、限られた予算の中で計画的に買い物をする必要があり、目的に応じて必要なものを選択する必要があることを視点とする。また、企画の規模については、友だちと協力して取り組むことで実行できそうな難易度かという視点で考え、合意形成を図る。(Aウ、Cア、Dウ)</p>	<p>〈おおきいかずの けいさんをしよう〉 算数 ○2位数の数の構成を基にした何十何十の計算の習熟を図る。 ☆本時では、学級会で計画されたパーティーに必要な「購入するもの」が決定されていることを受け、それらを子どもたちのできる範囲で計算してみることに挑戦する。実際の売買価格の計算は、1年生には複雑であるため、教師の裁量である程度単純化した計算問題として提示する。</p>	<p>◎なにをかうひつようがあるかな。 ◎ぜんぶはかえないよ。 ◎せんせいといっしょにけいさんしてみよう。 □がんばってかせいだおかねだからむだづかいはしたくないね。 □みんなでよくかんがえてきめよう。 ◎どんなじゅんびがいるかな。 ◎こんなにたくさんじゅんびができるかな。 □みんなでいっしょにがんばってじゅんびしようね。</p>
<p>〈おかいものを しよう〉 生活 ○「自分のお金」を支払って、ものを購入する経験を通して小さな消費者として島の経済活動に参画している実感を味わわせると共に、地域の人々との関わりを深めることで地域への愛着を深める。 ☆ほとんどの子どもは、ここではじめて自分の手で稼いだお金で商品を購入することになる。家庭生活の中で保護者に商品を購入してもらった経験と自分で稼いだお金で商品を購入したときの気持ちを比較し、充実感と勤労の貴さを感覚的に理解させる。(Bア、Dア)</p>		<p>◎はじめてじぶんのおかねでものをかうね。どきどきするね。 ◎じょうずにおかいものができかな。 □じぶんのおかねでおかいものができて、とてもうれしかったよ。 □いっしょうけんめいやさいのおせわをしてよかった。</p>
<p>〈パーティーを しよう！〉 特別活動・生活 ○学級会で話し合い、計画したことを友だちと協力して準備、実践することで、よりよい学校生活を送るための課題解決の力を培うと共に、豊かな学校生活の実現にむけた実践意欲を育む。 ☆友だちと協力すること、それぞれが役割をもつこと、みんなで決めた約束を守ることなどをルールとして、社会規範に則った秩序ある活動にすることを確認する。(Dウ)</p>	<p>〈パーティーの かざりつけをしよう〉 図工 ○紙の折り方や、切り方を工夫し、開いた紙の形を味わいながら、つなげたり、飾ったりすることを楽しむ。 ☆本時では学級会で決まった実践と関連させて、学級の飾り付けを行い、パーティーを盛り上げる。</p>	<p>◎きょうしつのかざりつけをしたいね。 ◎おりがみをきってきょうしつにたくさんはろう。 □みんなできめたルールをまもってたのしくあそぼうね。 □かたづけまでみんなできょうりよくしてやろうね。</p>

<p><つぎは どんなことをしようかな> 特別活動 ○一連の活動をふりかえり、はじめは難しいと思っていた企画を実行することができた喜びと、みんなで実践するよさを実感させることを通して、さらに日常生活をよりよくしていこうとする態度を養う。 ☆本時は、金融教育実践の一連の流れの終末とあらたな活動の起点として位置付けられる。お金の計画的な使用、ものとお金の交換関係、働くことの意義や価値等を視点にふりかえることで、新たな金融教育実践の目標を設定していくことも考えられる。(Aウ、Bイ、Dア、Dウ等)</p>	<p><いろいろなやさいを そだてたいな> 生活 ○これまで育ててきた植物の生長と自分たちの関わりをふりかえり、一生懸命に世話ができたと充実感と自分自身の成長に気づき、新たな栽培活動への意欲を高める。 ☆本時では、金融教育実践の一連の流れの終末と関連して、これまでの植物の栽培活動のふりかえりと今後の栽培活動の方針の決定、意欲付けを行う。子どもたちの実態に応じて新たな金融教育実践のための栽培活動の準備に取りかかる。</p>	<p>◎みんなでいっしょにたのしめてよかったね。たのしかったところをふりかえろう。 <input type="checkbox"/>じぶんたちのちからでパーティーをせいこうさせられてうれしいよ。 <input type="checkbox"/>おかねをむだづかいしないでかいたのができたね。 <input type="checkbox"/>いっしょうけんめいやさいのおせわをしてよかったよ。 ◎またみんなであそびたいね。 ◎もっともっとおいしいやさいをそだてたらうれしいかもしれないよ。 <input type="checkbox"/>つぎはこんなしよくぶつをそだててみたい。</p>
---	--	--

資料 活動の様子

写真1 プランターに入れる土を用意するぞ！



写真2 重たいけどみんなで運べば大丈夫



写真3 おおきくなあれ -1



写真4 おおきくなあれ -2



写真5 おおきくなあれ -3



波照間島の大部分は琉球石灰岩の厚い層に覆われており、農作物の栽培に必要な土の確保は容易ではない。本校では、校庭の一画に落ち葉を集めて腐葉土にするなどして栽培活動に必要な土の確保に努めている。写真は、その一画から土を運び、種をうえるまでの様子である。

実際には、種子の発芽に適切な市販の培養土を教師がこっそりと追加しておいた。しかし、子どもたちは自分で土やプランターまでも用意したことに満足した様子であった。いつでも世話ができるように、プランターは教室横のベランダに置いて栽培がスタートした。

写真6 きゅうりと背比べ-1



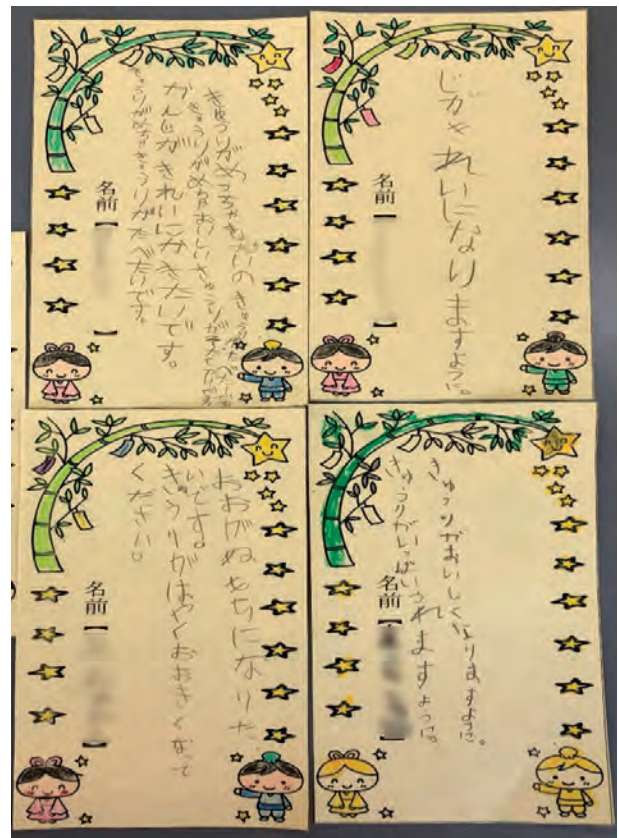
写真7 きゅうりと背比べ-2



資料1 せがのびてくれてうれしかったです



写真8 たなぼたのねがいごと



植物の生長はとても早い。あっという間に自分の身長をこしてしまったきゅうりに驚いた子どもたちは朝一番で背比べを行っていた。七夕が近づくと、短冊に願い事を書いた(写真8)。子どもたちの短冊をみると、きゅうりがおいしくなることや早く大きくなってくれることを願っているのがわかる。中には収穫と出荷を見通して、いっぱい売れるように願っている子どももいた。

写真11 きゅうりの収穫



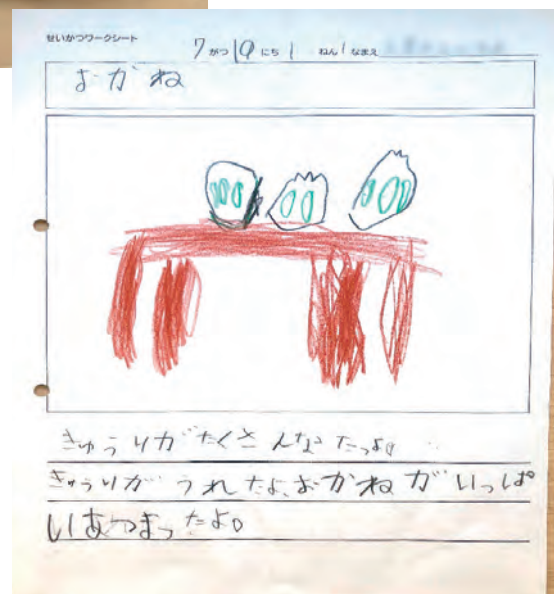
写真12 生産者シールを貼って商品に



写真13 陳列されている商品と看板

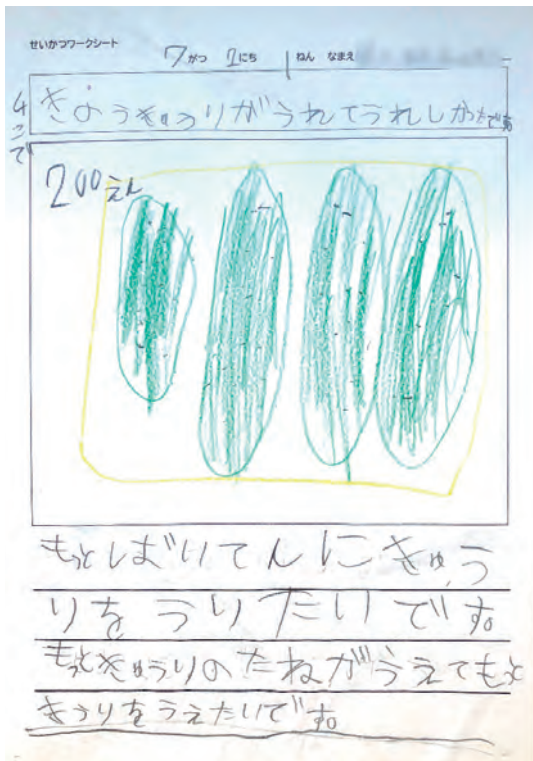


資料4 活動後のふりかえり

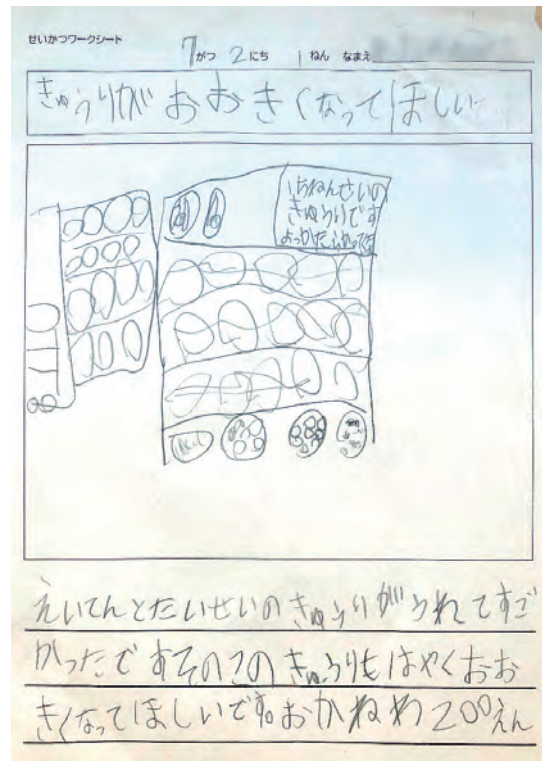


いよいよ収穫の時期になると、子どもたちは毎朝すぐにベランダへと向かう。きゅうりが筆箱と同じくらいの長さになっていると確認した子どもは自分できゅうりを収穫して生産者シールを貼って商品の完成である(写真11、12)。一番近い集落の共同売店は学校から徒歩30秒。看板の設置と陳列棚の用意をして頂き、写真13のような売り場となった。商品の1番目の購入者は、子どもたちの保護者だった。その後も、出荷してはすぐに売り切れ。子どもたちは売り上げをもらって大満足であった。

資料5 きゅうりがうれてうれしい



資料6 はやくおおきくなってほしい



資料7 おかねがはじめてもらえてうれしい



何度かきゅうりを出荷して、売り上げをもらうことを経験すると、なかには新たな種を植えてもっときゅうりを育てたいとふりかえる子どもも出てきた(資料5)。

一方で、きゅうりの生育速度は個体ごとに大きく違うため、なかにはしばらくの間出荷できずにいた子どももいた(資料6)。その後も粘り強く世話をし続けることで出荷までたどり着き、喜ぶ姿があった(資料7)。

どの子どもも、一生懸命育てたきゅうりが売れることはとてもうれしかったようで、「もっと育てたい」と栽培活動への意欲の高まりを感じることができた。